明治時代の中国語教育とその特徴

張　美蘭

序　文

(一)　日本における中国語学習の長い歴史

日中両国の文化は互いに影響、融合しあっている。中国語教育は日本の教育においてずっと重要な地位を占めてきた。琉球地域を含めて古代日本はすべて漢文化圏の国家、地域であり、早い時期より漢字が使用され、現在も漢字かなの混淆文を使用している。日本語の語彙、音声は、現在も中国語の字句や音声の影響を大いに留めている。日本における漢文化の形成と発展、漢字の使用は、日本人が中国の言語文字を学んできた歴史と密接に関係している。

『古事記』の記述によると、応神天皇一五年（二八四）、百済から日本に渡った阿直岐が、稚郎子皇子の漢籍学習に、王仁を推挙したとされる。翌年王仁は『論語』十巻と『千字文』一巻をもたらした［程相文 二〇〇一］。研究によると、『史記』は六〇〇～六〇四年に日本に伝えられ、重要な教科書となった。古代には宮廷教育の教科書であり、中世以降は中間層の漢学人材を養成するための教科書であり、明治時代からは漢学教育を普及するための教科書であり、数多くの漢学人材を養成するのに用いられた［魏 二〇〇三］。平安時代、朝廷は中国の大学に類似した朝廷官僚を養成する「大学寮」を京都に設立し、大学寮の「明経」「紀伝」の二つの科では儒家の「五経」および『史記』等史伝書を教材に定め、教材はすべて訓読された。

「大学寮」以外の官営学校も、訓読された儒家経典を主な教科書とした。江戸時代、儒学が公式の正統思想に格上げされた後は、儒学教育は官僚教育からすべての武家、平民に対する教育へと広まった。当時、各地の教育機関は、武家の子弟のみを受け入れる官営学校であれ、寺院が運営する「寺子屋」のような一般の平民子女が学ぶ民間の私塾であれ、少人数が出資し営む私塾であれ、一律に『論語』『千字文』『孟子』『大学』『中庸』等の儒家経典を必読教材としていた。今日にいたるまで、中国儒学および文学古典作品は一貫して中学・高校の必修教材とされてきた[胡 二〇〇二]。

つまり、日本の漢学研究の歴史は長く、学習者の数も多く、大量の翻訳作品や研究論文が生み出されたのである。中国の古典書籍が日本に伝わり、日本で発明された訓読形式の中国古典やそれに関する辞書の編纂は、日本で漢文が学習された歴史そのものであるといってよい。

(二) 白話口語を中心とする中国語学習の始まり
——長崎の「唐話」と琉球の「官話」——

明末清初期、長崎を中心として、日中の経済文化交流が盛んになるにつれ、中国語は日本に広く伝播し始め、「唐話」が形づくられた（長崎一帯に往来するのは中国の江浙、福建等の南方商人であったため、唐通事の発音は明らかな南方語音であった）。長崎通事であった岡島冠山（一六七四－一七二八）は中国語に精通した漢学者で、多くの「唐話」入門教材を著した。『唐話纂要』『唐音雅俗語類』『唐話便用』『唐音俗話問答』『華音唐詩選』である。彼は中国文学への造詣も深く、特に白話小説を愛読し、『通俗忠義水滸伝』『通俗三国志』『通俗元明清軍談』等を翻訳出版した。

一方、「官話」は琉球諸島を中心に発達した。『白姓官話』は琉球の中国語教材（官話課本）で、清代に台風に遭い漂着した白瑞臨が乾隆一四年（一七四九）に編集したものである。上級向きの教科書として当時の琉球の学習者に大きな影響を与えた。後に『広応官話』『学官話』『官話問答便語』も琉球の中国語教材となった[張美蘭 二〇〇五]。

六角恒広が述べているように、日本の中国語教育において、江戸から明治初期の二七〇余年、官営民営を問わず、各学校で教えられた中国語は基本的に「唐通事時代の南京語」であった。しかし、明治七年（一八七四）に状況が変化し始めた。同年三月、日本初の駐華公使が北京に入り、清朝官僚界ではすでに北京語使用に改められていて、各国公使館にはどこにも純粋な北京語を学ぶ留学生がいることを知ることになり、外務省に対して中国語学校から学生を北京へ派遣し学ばせるよう要望が出された。明治九年九

月、日本の中国語教育は、官から民へ、同時に南京語から北京語へと転換したのである。

(三) 明治初期の中国語（北京官話）ブーム

明治維新以後、日本は積極的に海外への進出を図り、中国との関係を強化し、大陸への発展戦略をとった。一八七一年、日本が主導し清朝政府と「修好条約」を締結し、両国は正式に外交関係を樹立した。通訳者が差し迫って必要となったことから、外務省は初の中国語専門の学校である「漢語学所」（一八七一）を設立し、また一八七三年に設立した東京外国語学校においても中国語教育を行った。他にも「日清社」（一八六七）、「振亜社」（一八七八）「興亜会支那語学校」（一八八〇）、「日清貿易研究所」（一八九〇）、「東亜同文会」（一八九八）といった民間の中国語教育機関が相次いで誕生した。アジア情勢および明治政府の政治、外交の動きから、北京官話を学ぶ重要性を見てとった一部の日本人は中国語学習と中国語教育の道に進み、専任の中国語教師となった。そして、学習、教育の過程で一連の中国語教科書を公刊した。まさに政府の後押し（中国語教育が政治、外交上必要であった）とこれら中国語学校の影響により、近代中国語教育は初期の繁栄の様相を呈していた。これは、明治時代の中国語教育が新たな歴史的段階に入ったことを物語っている［王順洪 一九九九、二〇〇三a］。

六角恒広は日本の近代中国語教育約八〇年の歴史を七つの時期に区分している。明治時代は五期に分けられている。

第一期：明治四年（一八七一）～明治一〇年（一八七七）、外務省漢語学所の設立に象徴される近代中国語教育の初期で、南京語の時期とも言える。

第二期：明治一〇年（一八七七）～明治一九年（一八八六）、北京官話に移る時期で、中国へ北京官話研修生を派遣し、日本軍が直接中国語教育に干渉した。

第三期：明治二〇年（一八八七）～明治二八年（一八九五）、中国語教育が大学の教育課程に取り入れられるとともに、ビジネスや軍事にも利用された。

第四期：明治二八年（一八九五）～明治三八年（一九〇五）、日清戦争と日露戦争の影響を受け、中国語教育は日本の国内外、官私立学校に広まった。

第五期：明治三八年（一九〇五）～大正七年（一九一八）、日本国内の中国語教育は衰退したが、中国東北部の「満鉄」関連の日本人への中国語教育が強化された［王順洪 一九九九］[1]。

以上から、明治初期の中国語教育は、後に日本に起こる第二、第三の「中国語ブーム」および日本の近代中国語教育の方向性に影響を与えたと言える。つまり日本の中国語

教育が政府の支配と影響を直接受け、政治、外交、商業貿易上の必要性に貢献したということである。一八九四年の日清戦争以後、日本は中国の領土である台湾を占領し、大勢の日本人が台湾へやってきた。一九〇五年の日露戦争では遼東半島の支配権を獲得し、多くの日本人が中国東北地方へやってきた。このため、中国語を学ぶ日本人はにわかに増加し、新たな中国語学校「善隣書院」「東亜同文書院」が設立され、「東京外国語学校」が復活し、一部の大学や商業学校も中国語課程を開設した。後続の「中国語ブーム」は初期の「中国語ブーム」に比べ、日本政府の対外侵略主義に利用されるという性格と特徴がいっそう明らかなものであった［王順洪 二〇〇三b］。

㈣ 近代中国語教育史に関する研究

明治時代の中国語教育史に関し、日本の学者六角恒広、安藤彦太郎等が論著を発表し、中国の学者王順洪［一九九九、二〇〇三a・b］、卞立強が前後して両氏の著作を翻訳し、関連する論文を発表した。銭婉約［二〇〇五］は「近代日本の中国語教育発展の曲折性」、陳珊珊［二〇〇五］は『『亜細亜言語集』と一九世紀の日本の中国語教育」、王澧華［二〇〇六］は「日訳漢語読本『官話指南』の取材と編集」についてそれぞれ考察し、明治時代の中国語教育の歴史的様相を全面的に明らかにした。本論文では明治時代の中国語教育の歴史的特徴を重点的に分析し、日本で編纂された中国語教科書の内容上の特徴と価値を検討することにする。

一 明治時代の中国語教育

近代中国語教育の主な特徴は、現代中国語（主に口語）教育に見ることができる。明治時代初の中国語教育機関「漢語学所」設立時に使用されたのは、単語を配列した『漢語跬歩』と手写本による『閭里閙』『訳家必備』等の唐話教材であった。しかし国際情勢の変化に伴い、中国語教育の目的と学習内容に重大な変化が起こった。内容は古典文語から白話中心となり、口語は南京語から北京官話へと転向した。また、価値基準は文化的意義から主に実用性を求めることになった。中国語は中国を学ぶための媒介から中国侵略のための道具となったのである［王順洪 一九九九］。この変化によって、北京官話教育に適した新教材が現れ、それは日本における現代的意義を持つ中国語教育の始まりを象徴しているのである。

以下、明治時代の北京語教材から、この時期の中国語教育の概況を分析する。

(一) 北京官話教育のための新たな中国語教材

北京官話の教育のためにどのような教材が使用されたのか。四つに分類し以下に述べていく。

(1) 既存の教材の利用

当時の第二言語としての北京語口語学習教材に、英国駐北京公使ウエード（一八一八－一八九五）が外交秘書官在任中に著した『語言自邇集』(*A Progressive Course Designed to Assist the Student of Colloquial Chinese, as Spoken in the Capital and the Metropolitan Department*) がある。一八六七年に第一版が出版され、一八八六年に再版、一九〇三年には第三版が出された。これは英国大使館・領事館の通訳学習者のために編集されたもので、説明、注釈、訳文はみな英語であった。内容は「散語」、「問答」、「談論篇」、「践約伝（the Graduate's Wooing、第二版で付加）」等中国語の会話と練習であった。北京では外国の大使館員によく用いられていた。明治九年（一八七六）三月、北京官話留学一期生として北京に派遣された中田敬義は、「北京に来てみたが、語学の教科書はなく、ただ英国駐中国公使ウエードの著作『語言自邇集』があるのみであった。この本は確かに大変貴重な本で、価格もかなり高く、買うことができない。そこで中国の写し屋に写させて、英紹古という名の教師を呼び、言葉を学んだ」[2]。この本は日本へ持ち帰られ、北京官話の教材となった。『語言自邇集』に収録、叙述されているのは、正真正銘の北京官話の口語であり、これは南京官話から北京官話への転換期にあった日本の中国語教育に最も必要とされたものであった。東京外国語学校でも、学校所蔵の希少な『語言自邇集』を学生にすべて書き写させ、それを教科書としていた。

張方［二〇〇五］の研究によると、ロシアの著名な漢学者であり、ギリシア正教宣教師でもあるI・I・C・ポポフは、ロシア駐北京大使館領事の職務を終え、一九〇二年辞職し帰国後、ペテルブルク大学で教鞭をとった。その時彼もウエードの『語言自邇集』を中国語専攻の一、二年次生の教材として使用している[3]。

(2) 既存教材を利用した教材

『語言自邇集』の影響を受け、日本においても『語言自邇集』を抜粋した日本人が中国語を学ぶための中国語教材が次々と出版された。例を挙げると、明治期以降の日本人が自ら翻訳編集した初めての教材である広部精『亜細亜言語集 支那官話部』（一八七九）、広部精『総訳亜細亜言語集 支那官話部』（一八八〇）、興亜会支那語学校『新校 語言自邇集』（一八八〇）、宮島九成『参訂漢語問答篇日語解』（一八八〇）、金子弥平等が翻訳編集した『清語階梯語言自邇集』（一八八〇）、福島安正『自邇集平仄編四声聯珠』（一八八六）等である。以下、詳述していく。

『亜細亜言語集 支那官話部』は、広部精（一八五四－一九〇九）が翻訳編集した日本初の北京語を標準語とした中国語教科書である。一八七七年から翻訳編集を開始し、一八七九年六月に第一版（小石川清山堂社）が出版され、以後次々と増補改訂が行われ、明治時代に最も広く影響を及ぼした中国語教科書である。[注3] この『亜細亜言語集 支那官話部』（一八九二年再版本）と『語言自邇集』（一八八六年再版本）を対比調査した結果、一部の箇所に手を入れてはいるが、『亜細亜言語集 支那官話部』は、基本的に『語言自邇集』の内容をすべて吸収していることが確認された。六角［一九九二］は一、二箇所を手直しした他はほとんど原本のままであり、また『語言自邇集』にはない内容を、ドイツの通訳官 Arenbt 氏の『通俗欧洲述古新編』から一部採用していること、他に、以前収録した内容を「六字話」、「常言」、「続常言」として本文上欄に収めていることを指摘している［王 一九九二］。

陳珊珊［二〇〇五］は対照研究を通して、『亜細亜言語集 支那官話部』の翻訳編集の価値は以下の点にあるとした。

①『語言自邇集』の価値および影響を日本人に真に理解させた。これにより、さらに多くの日本の学者や学生が『語言自邇集』という〝支那語時代〟当時の文体を用いた教科書の源」である言語著作に触れることができ、北京官話への扉を開いたこと。

②より多くの中国語学習者に初めて中国語教科書において音韻、品詞区分、量詞の使用といった音声、文法面の知識に触れさせ、日本の中国語教育が科学的、先進的、機能的な語学教育法へと大きな一歩を踏み出すことができたこと。

③ウエードの音声教育の理論と方法を完全に引用し、すべての新出単語に発音の注釈を加え、カタカナで読み方を注記し、圏点で声調を表示した。これによって日本の中国語教科書は理論的発音表記のない時代に終わりを告げた。

④『語言自邇集』を取り入れ「文法」に重点を置くと同時に、既存教材の各常用語の分類について科学的に整理し、日本の中国語教科書における日常の事物に基づいて区分された品詞分類の乱れた状態に初めてメスを入れたこと。

これ以後、日本の中国語教科書は規範化、効率化、文法化されていくこととなる。『亜細亜言語集 支那官話部』の出版は、世界の中国語教育史に輝かしい一ページを刻んだといってよい。

同じく広部精の手による『総訳亜細亜言語集 支那官話部』は、全四巻で、一八八〇年、一八八二年に前後して出版され、編集形式は前に中国語をおき、後ろに日本語訳を

付けている。『語言自邇集』の全編を翻訳し、内容は中国語発音の日本語表記、「散語」「続散語」の中の語句と短文の日本語訳、「談論篇」の全訳および語句と短文の日本語訳である。

興亜会支那語学校『新校 語言自邇集』（一八八〇）は、『語言自邇集』から「散語四〇章」を取り出し、若干の手を加えて、一冊にしたものである。新出の漢字には、ウエード式ローマ字で発音を記している。

宮島九成『参訂中国語問答篇日語解』（一八八〇）は『語言自邇集』の「問答篇」「談論篇」を模範とするが、言葉の用い方や文の構成をわずかに変えているため、改作とも言える。全一〇三章とし、小さな見出しを付け、日本語に翻訳している。

金子弥平ら『清語階梯語言自邇集』（一八八〇）は、初版本『語言自邇集』に基づいて日本で翻訳出版された簡略本であり、原書の漢字解説部分が削除されている［六角 二〇〇〇：九］。

福島安正『自邇集平仄編四声聯珠』（一八八六）は、『語言自邇集』の平仄篇（四声）に現れる文字を各章の冒頭に置き、中国の官制、貿易、風俗等について問答を展開したものである。書中に山県有朋の序文を附し、陸軍文庫から出版された［安藤 一九九一：三〇］。

(3) 日本語翻訳を素材とした教材

中田敬義は、一八七六年、外務省の第一回地方選抜を経て漢語学所に入り、北京官話留学生一期生に選ばれ、一八七六年北京に派遣された。北京公使館で北京官話を学んだ彼は、東京外国語学校の校長渡部温に委嘱され、日本語の『イソップ物語』を『北京官話伊蘇普喩言』に翻訳した。これも明治時代初期の中国語教科書となった。

鄭永邦は北京官話で小幡篤次郎の日本語版『生産道指南』（英語版 *The Compendium of Political Economy form the Lesson Book* からの翻訳）を重訳し、題名を『生財大道』と改め、光緒丁亥年（一八八七）駱徇、黄裕寿、金国璞（鄭永邦の中国語教師）の序を付けて刊行した。教材は物価、工賃、貧富論、資本論、租税論、貸借論、分業論の各章に分かれ、商業、貨幣、対外貿易について解説している。論証、説明的文章の翻訳作品であるため、文の構造も『北京官話伊蘇普喩言』に比べ複雑で豊かになっている。北京口語がふんだんに用いられた優れた教科書の一つである。

(4) 新たに編集された口語教材

『官話指南』（一八八一）は、日本駐清朝公使館の「学生通訳」呉啓太が主となり、鄭永邦がこれを補佐し、中国の文人黄裕寿、金国璞の指導、支持、激励のもとに作成したもので、中国への留学者が中国語を学ぶ書物を「切日用者」（田辺太一序）の原則に基づいて整理編集したもので

ある。初稿を黄、金の二人が再び審査し定稿にした後、東京で印刷出版された。これが日本初の北京官話読本の一つとなった。

王澧華［二〇〇六］は、最初は大使館、領事館の学生通訳がこの本の主な対象であったが、しばらく後に日本の公立私立の中国語学校で用いられるようになったと述べている。この本の特徴は以下の点にある。

①巻頭の「凡例」では中国語の音韻分析に力が注がれ、他に発音特徴、発音規律、発音練習があり、『語言自邇集』の特別規則、学理研究と比較すると、初学者にとって、簡潔で実用的であるという優れた点を備えている。

②全四巻のうち、第一巻「応対須知」と第三巻「使令通話」は、日常会話を重んじており、ねらいがはっきりとしていて実用性が高く、およそ官庁での日常の応対、公館でのやりとりで必要な基本文型と用語がほとんど網羅されている。

③第二巻「官商吐属」と第四巻「官話問答」では、前者はストーリー性を持たせ読む楽しみを重視し、使用人、その他に仕事や事務等を指図する言葉を、後者は主に通訳官の外交事務を再び述べており、いずれも明らかに書きことば学習の傾向が強い。

『官話指南』が出版された後、各種改訂本、注釈本、翻訳本が相次ぎ、六三年間で四五版に達している。

『北京官話 談論新篇』（一八九八年、積嵐楼書屋発行）は、金国璞が日本滞在中に、平岩道知と編集した教材で、全百篇である。主に日常生活、役人や商人の付き合いで用いられるものが中心だが、ある部分は当時の中国で起きた新たな変化を反映している。例えば英語の学習、天津の各国租界、北洋通商港、新聞、株の購入、外国語書籍の翻訳（兵器製造に関する書籍）、鉄道敷設、鉱業の創業、上海の繁栄、戸部の株発行、新法研究などである。しかし内容は依然として貿易等に関するものに限られている。

『華語跬歩』（一八九〇）は御幡雅文の中国語教材の代表作である。御幡は一八七九年、陸軍参謀本部によって東京外国語学校から選ばれ、北京に派遣されて北京官話を学んだ。帰国後は軍の中国語教官となり、広範な影響力をもつ中国語教科書や辞書を編集した。『滬語便商』（一八九二）、『滬語便商意解』（一八九二）、『滬語津梁』、『官商須知文案啓蒙』（一八九二）、『生意集話』（一八九二）、『台湾土語読本』（一八九七）等である。

『官話急就篇』[5]（一九〇四）は宮島大八によって編まれた問答形式の教科書である。その内容は「名辞」「問答之上」「問答之中」「問答之下」「散語」である。宮島は中国に七年もの間留学し、後に中国語教育事業に携わった。また宮島と親交のあった張廷彦[6]にも『家庭常語』『応酬須

知』という著作がある。この初級から中級向けの教科書は、後にほとんどすべての中国語を学ぶ日本人に読まれた[六角 一九九二：一三六]。これらは日本の中国語教育に長期的かつ広範な影響を及ぼしている。この前にも宮島は『官話篇』を編集し、一九〇三年善隣書院から発行している。「腔調」「散語」「問答」「議論」の計八部分にわたり、彼が中国留学七年間でマスターした語句を展開し、とりわけ「議論」篇では多くの古典や故事等を、北京口語で表現している。

『燕京婦語』（一九〇六年以前）は、北京駐在の日本人女性が北京語を学ぶための会話教材である。ある程度の身分にある北京の満州族旗人女性の日常生活を題材とした上下巻、全二二課で、上巻は一～一二課、下巻は一三～二二課である。第一～三課の内容は近所の女性同士（あるいは男性と女性）が朝、昼、夜に顔を合わせたときのあいさつと雑談、第四課と第七～一一課は中国人と外国人の初対面、新年、見送り、歓迎、宴会等の場面での会話（中国人は満州族の旗人を指し、外国人は日本人に限られる）である。第五、一二、一三課は親戚、友人間の訪問、誕生祝い、栄転祝いなどの会話である。第一四～二二課はそれぞれ、布を買う、服を作る、花を植える、花を買う、掃除、部屋を借りることにはじまって、仕立屋、装身具屋、簪屋等を呼んで衣服、簪や腕輪を作ったり、螺鈿細工を修理させたりする時の会話である[江藍生 一九九四]。

『官話応酬新篇』は渡俊治著、東京文求堂より一九〇七年に刊行された。この本は著者が保定直隷師範学堂で日本語を教えていた時期（一九〇二－一九〇四）に、中国人と接した経験を基に編集したもので、社交上の言葉に重点を置き、『語言自邇集』の「問答篇」形式で作られている。特徴的な点は、各篇の最後に日本語の注釈が豊富にある点である。第一、二、三篇で主に述語を紹介し、第四、五、六篇は「応対問答」上、中、下で、内容は比較的簡単な会話で、北京口語の入門書と言える。当時の口語をふんだんに用いている。

(5) 北京官話教材の変遷と評価

以上、北京官話のための教材の発展を概観した。『語言自邇集』の学習、模倣から始まり、中国人教師の協力により北京語教材が編集され、さらに日本人学習者向けに日本語の読み方と意味を注記した教材が編集された。しかし全体的な枠組みという点で『語言自邇集』の影響を打破することはできなかった。

ところが『官話指南』になると変化があらわれてくる。呉啓太、鄭永邦は「明治十四年十二月」の「凡例」全十条の第一条で以下のように述べている。「私は北京で語学を学び、これまで三年間、先生に就いて指導を受け、徐々にある程度把握することができるようになったが、それでも

それは滄海の一粟のようにわずかなものでしかない。ここに編集した『平日課本』には数え切れないほどの漏れがある。いま印刷製本し、ただ初学のためとするが、識者の笑いものになることは、免れないとわかっている」。これは、呉啓太、鄭永邦が北京で学んで作り上げたもので、『平日課本』はすでに『語言自邇集』を頼りにしていないことを表明している。「数え切れないほどの漏れがある」『平日課本』を「印刷製本する」目的は「ただ初学のため」、すなわち日本語版北京官話教材の不足という焦眉の急を解決するためであるというのである［王澧華 二〇〇六］。

教材の著者たちに共通して言えることは、そのほとんどが中国へ行って中国語を学んだ経験を持ち、中国人教師を意のままに操ることに長けており、自分が学んだ中国語の資料を利用し、手を加えて日本人学習者用の新教材としたことである。

広部精が最初に学んだ中国語は江浙音で、彼の中国語教師であった周幼梅は蘇州出身であり、葉松石は浙江嘉興出身であった。『語言自邇集』の中国語は北京官話である。したがって広部は同人社で中国語を教えていた時期に東京外国語学校へ行き、そこで中国語教師の薛乃良について北京官話を学び、あわせて『語言自邇集』を基礎として、北京官話の教科書を編集したのであった。彼の『亜細亜語言自邇集』も薛乃良の影響を受けている。

中田敬義が翻訳した『北京官話伊蘇普喩言』は龔恩禄の協力を得、英紹古の校閲を受け（二年かかって、幸い脱稿し、私は校正と出版を言い付かったので、忙しい中、昼夜怠ることなく、何度も読み返した」英紹古らの序）出版された。中国人英紹古、恩禄の協力による産物と言えるであろう。

『官話指南』は黄裕寿、金国璞の協力により、呉啓太が鄭永邦の補佐を受けつつ編纂し完成したものである。黄裕寿、金国璞が光緒七年に記した序には、「われわれはこの書を見て深く感動した。そこで校閲して、序を作り、その顛末を述べる」とある。これも日中合作の産物であることがわかる。

『北京官話 談論新編』は金国璞が日本滞在中、平岩道知（日本参謀本部から一八七九年中国へ留学）とともに編集したものである。

『自邇集平仄編四声聯珠』（一八八六）は、福島安正が北京で日本公使館武官在任中の二年弱の間に、英継という旗人の協力により作成したものである。

これらの教材は程度こそ異なるが中国語学習上の要求を満たし、まさに六角恒広が述べているように、「入門書としては広部精の『亜細亜言語集』の他にふさわしいものはない」「初級入門から中級開始段階で使用する『官話急就

篇』の出版は、初学者と教師にちょうど合う」。『官話指南』『談論新篇』は、「教科書として広く使用されるが、入門書ではなく、内容は議論で用いる中級程度の言語である」[六角 一九九二：一五一]。『華語跬歩』は初級入門から中級である」[六角 一九九二：一四一]。

初級の『亜細亜言語集』『華語跬歩』から『官話急就篇』さらには中級の『官話指南』『談論新篇』にいたるまで、これらの書物によって日本に中国語が伝播するスピードが加速していったのである。

(二) 旗人が日本の中国語教育に果たした役割

(1) 旧東京外国語学校(一八七三―一八八五)が招聘した中国人北京官話教師

清代の中国で、北京官話に最も長けていたのは旗人で、旗人の中国語はしだいに北京官話の模範と見なされるようになった。明治時代には中国人教師を招くようになり、まず一八七六年、旧東京外国語学校では旗人の薛乃良を招聘し、二年(一八七六・九―一八七八・七)にわたり北京官話を教授させた。後任教師は旗人である英紹古の次男、龔恩禄(一七七八・九―一八八〇・九)で、後に蔡伯昂(一八八〇・九―一八八一・一〇)、関桂林(一八八二・五―一八八四・七)、張滋肪(一八八二・五―一八八五・一〇)と続いた。旧東京外国語学校は、設立から他校と合併する一八八二年まで、五名の中国人教師を招聘し北京官話を教授させたのである。

(2) 新東京外国語学校設立(一八九七)後の北京官話教師

最初は旗人の金国璞である。金国璞に関して、六角恒広はこう述べている[六角 二〇〇〇：三八]。「金国璞は、号を卓庵と言い、英語に堪能であった。明治三〇年(一八九七)東京外国語学校設立時から、明治三六年(一九〇三)まで在職し……明治時代最も慕われた中国人教師であった」。日本滞在中、金国璞は独自に『北京官話士商便覧』[7](明治三四年〈一九〇二〉)を編集し東京文求堂書店から発行し、四年後に田中慶太郎がその日本語版を翻訳出版した。他に、『支那交際往来公牘』(一九〇二年初版、翌年呉泰寿(呉啓太の弟)が訓訳本を出版した)、『北京官話 今古奇観』第一編(文求堂、一九〇四年版)、第二編(一九一一年版)などがある。

金国璞の後には博啓来(一九〇三―一九〇四)、松雲程(一九〇四―一九一一)、于冲漢(一九〇〇―一九〇四)、長孝移[8](一九〇一―一九〇二)、宮錦舒(一九〇四―一九一一)、張延彦[9](一九〇六―一九〇九)[六角 一九九二：一六三―一六四]が続く。他には曹自元(一八九九―一九〇〇)、劉雨田らの中国語教師がいた。

(3) 北京の日本人留学生が師事した中国語教師

中田敬義は一八七六年北京に派遣され、公使館で旗人の

教師英紹古に北京官話を学んだ。

福島安正も北京で日本公使館武官在任中の二年近くの間、旗人の教師英紹介に北京官話を学んだ。

宮島大八は一八八七年北京へ留学し、張裕釗（桐城派の学者）に七年もの間師事した。

留学生が北京で中国語を学習したという経験は彼らが後に編集した北京官話教材に直接的な影響を与えている。その意味で、旗人教師が日本の中国語教育において重要な役割を果たしたと言ってもよいだろう。

二　明治時代の北京語教材の資料的価値

教材の資料価値は二つに大分できる。

㈠　官話系統の変化を反映する資料

江戸時代から明治初期まで、日本で行われていたのは唐通事が代々伝授した南京官話であった。明治四年（一八七〇）に外務省が設立した漢語学所、および明治六年に設立された東京外国語学校漢語学科で教材として用いられたのは、支那語音学を用いた『三字経』、単語を並べただけの『漢語跬歩』、手写された『閙里閙』、『訳家必備』等で、これらはみな唐通事時代の唐話教材である。明治七年、イギリス、フランス、アメリカについで、日本も公使を中国に駐在させるようになって、ようやく清朝の官僚界では北京官話が通用していることを知った外務省は、欧米等の慣例をまねて「学生通訳」を派遣し、北京官話を学ばせた。日本の中国語学習教材の変化は、中国官僚の用いる言語系統の変化を反映している。このことは『語言自邇集』序に述べられている内容とも符合するものである［王順洪　二〇〇三a］。

㈡　清末民国初期における北京官話の研究資料

これまで初期の北京語研究に用いられた材料は、初期の『紅楼夢』、『児女英雄伝』、次に『語言自邇集』（一八八六）、小説『小額』（一九〇六）、さらに続いて老舎の一九二〇年以降の作品、一九四〇年頃のその他の北京派小説、一九八〇年以降の王朔等の作品などである。一八七〇～一九一〇年の『官話指南』（一八八一）、『談論新篇』（一八九八）、『燕京婦語』（一九〇六）等一連の北京語学習教材を研究対象とした者はなかったが、これらは、北京語研究の最上の素材である。以下に、その価値を見てゆくこととしよう。

(1)　豊富な北京語口語語彙

『北京話語詞匯釈』（一九八七）、『北京話詞語』（二〇〇一）等の専門書に収録されている口語の語は、明治時代の中国語教材に見ることができる。これらの語は北京語口語

の特徴的な語と言える。

中田敬義の『伊蘇普喩言』には以下の語が見られる。

才剛[10]、抽冷子、到了儿、多儿[11]（多儿血）、多喒、定規、動不動儿的、提溜、嘎拉、架不住（経受不住）、簡直、就結了、觭角、合式、黒下、好不好的、耗子、両下里、来着[12]、料估[13]、来不来的[14]、冷咕叮、溜打、末末了儿、末末儿了、末後[15]、目下、您納[16]、奈因、娘儿們、普哩普儿的、瞧瞧、是不是的、他納、下剰、喳、左不過、左近[17]等

『北京官話伊蘇普喩言』にはさらに特筆すべき点がある。それは翻訳に注釈が付いていることで、百年前の北京方言の語彙を理解するのに大変役立つ。例えば、

(a) 「接」は、上声で発音し、「から」という意味である。

「蛇甦忘恩」 冬令一天、太陽落的時候儿、一個鄉下老儿接庄稼地里回家、在道儿上見一個籬笆障儿底下、有一条将要凍死的小長虫儿。（冬のある日、太陽が沈む頃、ひとりの田舎の老人が田畑から家へ帰る途中、道の垣根の下に、一匹の凍えて死にそうなヘビを見つけた。）

『語言自邇集』[二〇〇二：二〇七]にも「接那儿到京還有多遠呢？」（そこから北京まではどれほどの距離がありますか）という用例があり、注釈は、「接那儿：从那儿。接 chieh は、ここでは〝打 ta〟、自、从に同じ」と記している。なお『亜細亜語言自邇集』がこのくだりを引用する時に「接」を削除したのは、広部精が最初の二人の中国語教師の影響（江浙方言）を受けたためではないかと見られる。編者が手直ししたことにより『語言自邇集』に採られている語彙に変化の痕跡が残されたのである。

(b) 「所」は、「ほとんど」という意味である。

「羊狼劣狐」 就又叫過狐狸来問説：「我嘴里的気、是怎麼様的味儿？」狐狸躬身領命説、奴才這両天傷風、鼻子所不行。（キツネを呼んで尋ねた。「私の息は、どんなにおいがする？」キツネは体を曲げて、ここ数日風邪を引いて、鼻がほとんど利かないと言った。）

「所」は、副詞で、「ほとんど」という意味である。『北京官話伊蘇普喩言』の中に四例、『談論新篇』に一例、『官話指南』に九例、『語言自邇集』に四例ある。ウエードは引用文に注釈を加えて、「我好些天総没看書、『通鑑』是差不多忘了、那『漢書』所全忘了」（私は何日も本を読んでいないので、『通鑑』はおおかた忘れてしまったし、『漢書』はほとんど忘れてしまった）。注：所全忘了、ほとんど忘れてしまった。所 so は、ここでは〝全 ch'üan〟（全部、すべてみな）のように言葉の意味を強める語である。この表現方法は北京語特有のもので、外国人にはほとんど理解できない」と記している［威妥瑪 二〇〇二：四三二］。

(c) 「哈什」は呵欠（あくび）

「兎亀較跑」 打了幾個哈什、伸了幾回懶腰。（いくつかあくびをして、何度も背伸びをした。）

(d) 「眈眈」の音は学略（に同じ）、「観察する」という意味である。

「鹿蔵牛圈」 往四下里眈眈、見干草堆里露着一対鹿觭角尖儿。（あたりを見回すと、干し草の山に一対のシカの角があった。）

「強中有強」 前后左右一眈眈、忽然看見一把鉄銼、一直的拿了。（前後左右を見回すと、鉄のやすりをずっと握り締めていたことにふと気づいた。）

(e) 「嗙」は、音は傍（に同じ）、上声、「ほらを吹く」という意味である。

「鴿負族多」 在棚子里養活的鴿子、自嗙親属係衍。在房上落着的老鴰対他説：「哈、別混嗙這様的事了。……」。（小屋で飼われているハトは、自分は親類だとほらを吹いた。屋根に止まっていた老いたハクチョウが彼に言った。「なに、そんなでたらめを言ってはだめだよ。……」）

(f) 「掏」は、音は轟（に同じ）、「追い払う」という意味である。

「狼巧欺羊」 就把狗掏開。後来没了守護的、若許的羊被狼吃的一只也没剰下。（犬を追い払うと、守るものがいなくなり、たくさんのヒツジがオオカミに食べられ一匹も残らなかった。）

(g) 「空」は、去声、「逆さに吊る」という意味である。

「衰猫図鼠」（猫）後腿儿抓住矮処儿託板儿的舁子、前腿儿站在地下、倒空着。……任凭你（猫）在這儿空到多嗜、就是你被用干草揎在箱子里頭、你搆得着的地方、我們（鼠）也是不敢去的。（（猫）は後ろ足を低いところにある敷板の舁子につかまれ、前足は地面に立って、逆さ吊りになっていた。……ここにいつまで逆さ吊りになるのかはきみ（猫）次第だ、たとえ干し草で箱の中に押し詰められても、きみの手の届くところへは、ぼくたち（鼠）は行かないよ。）

(h) 「撅」は、「折る」という意味である。

「傷父訓子」 他們就毫不費力、一撅就撅折了。（彼らはまったく苦労することなく、折ろうとしたらすぐに折れた。）

次に、『燕京婦語』を見ると以下のことばが用いられていた。

阿媽、挨[18]、打（従）、多儿銭、估摸、帰着東西、就結了、溜達、娘儿們、偏您了（用餐比你早）、偏過了、犄角、四啊字（四個字）、四啊月（四個月）、五哇大（五個大）、甚麼的、他納。

また、『官話指南』には以下のことばが用いられてい

る。

不得勁[19]、布菜、成衣舖、磁実（壮実、結実、扎実）、抽冷子、出門子（出嫁）、墩布（抹布）、得了[20]、灯虎、瞎咧咧、估衣舖、嘎拉儿（〃剮旮旯〃に同じ）、赶、康健、苦力、見天、就手儿（順便）、狡情（嘴硬）、遛達、磨（耗時）、磨不開（不好意思、拉不下臉来）、没落子（没着落）、娘儿們、沏茶、拾掇、下剰、消停（安静、清静）、胰子[21]、銀号、自各儿、喳、扎挣（勉強支撐着）

『参訂中国語問答篇日語解』には、以下の語がある。

你吶、就是了、布[22]（菜）、冷孤丁、扎挣[23]、普里普儿[24]、望看[25]

『談論新篇』（一八九八）に以下の語が見られる。

打哈哈[26]、定規、短（少）、就手儿、簡直、解（従）、教習、擠対（人をいじめる、人に嫌がることをする、〃擠兌〃とも言う）、料估、来着、起頭儿、沏茶、偏過了、拾掇、望（前置詞の場合）

鄭永邦『生財大道』（一八八七）には以下の語があった。

抽冷子、打、打…里頭／上、得了（完了）、短、多咱、到底、定規、噶啦子（角落）、赶、帰斉、後手儿、就是了、就結了、解、拉倒、来着、来不来、両下里、末後儿、没落子、起、冷不防、拾掇、所（副詞の場合、「ほとんど」、一〇例あり）、書信局、提溜、下剰、胰子、左不過、左不是、左近

(2) 清末の北京口語の特徴を反映する豊富な文型

〔反復疑問の文型について〕

〃VP（動詞）不VP（動詞）〃あるいはまれに〃VP＋O（目的語）不VPO（目的語）〃という疑問文の他に、さらに〃VP＋O＋不＋VP？〃、〃有＋O＋没有？〃という文型は用いられているが、〃VP不VPO〃という疑問文はない。例えば以下のようである。

(1) 你知道獅子的洞不知道？知道你是這麼様不是？（『北京官話伊蘇普喩言』）

(2) 您看這前後的情形、像是有人保進来的不像？（『談論新篇』）

(3) 你是給人説合甚麼事情来着？告訴得我告訴不得？（『官話指南』）

(4) 那一個封儿是四両銀票不是？他昇的是江蘇的知府不是？他是前儿個引見的不是？（『燕京婦語』）

(5) 我記得武戯唱的是蟠桃会、您和記得唱甚麼戯不記得了？（『燕京婦語』）

朱徳熙〔一九九一〕は〃VO不V〃は主に北方方言に見られ、〃V不VO〃は主に南方方言に見られると指摘している。『亜細亜語言自邇集』『伊蘇普喩言』『官話指南』『談論新篇』『燕京婦語』等にはV不VOの用例は見られず、北方方言の用法上の特徴を反映している。

〔反復疑問文：〝VP（O）没有？〟について〕

(1) 可不知道也有什麼内地土貨出口没有呢？（『談論新篇』）

(2) 託我給請一位先生、不知道您意中有合宜的人没有。（『談論新篇』）

(3) 這三十位在股的人、都交出点儿銀子来没有？都還没交出来哪。（『談論新篇』）

(4) 你看見獅子的脚跡没有？不知道他的性格也変了没有？（『北京官話伊蘇普喩言』）

(5) 你買完了東西了没有？二哥、您找了没有？（『燕京婦語』）

明代の〝VP不曾〟から清代の〝VP＋没有〟型の疑問文へ移行する中で、〝没有〟は主要な否定副詞となった。『官話指南』に一五例（動詞〝有〟六例、その他の動詞九例）、『談論新篇』に一九例（うち〝有〟一三例）、『燕京婦語』に四例が現れる。清代の『児女英雄伝』には〝VP不曾〟疑問文（七例）がまだなお見られるが、明治時代の教材にはもうこの形式は現れない。つまり一九世紀末から二〇世紀初頭の北京語作品において、否定副詞は基本的に〝不曾〟から〝没有〟へ交替を終えたと言える。

〔〝把…給VP〟処置文について〕

〝把…給VP〟の処置文が初めて現れたのは清末の『児女英雄伝』であった。李煒[27]［二〇〇四］の研究によると、この〝把…給VP〟処置文は北方語の用法で、北京語の中に最もよく見られるものである。〝把…給VP〟の発生およびその発展に関して、石毓智［二〇〇四］、李煒［二〇〇四］、劉雲［二〇〇六］が前後して論じたが、分析資料は、劉雲が『語言自邇集』（一八八六）、小説『小額』（一九〇六）を用いた他は、『駱駝祥子』、『侯宝林相声集』、『馬季相声選』、『編輯部的故事』、『虎口遐想――姜昆梁左相声集』、『評書聊斎志異』（一九五四）、『京味小説八家』（一九八九）等、ほとんどが一九二〇年代以後のものであった。

明治時代の日本の中国語教材は一九世紀末の北京語材料の空白を補うことができるものである。その中から我々はこの文型の発展の筋道をはっきりと見てとることができる。〝把…給VP〟処置文は『談論新篇』に六例、『伊蘇普喩言』に七例、『官話指南』に九例、『燕京婦語』に四例見られる。以下に例示する。

(1) 先是南辺人説話吾呀吾呀的聴不明白、把学生更給鬧糊塗了。（『燕京婦語』）

(2) 赶明儿您先把茶銭給拿過去。（『燕京婦語』）

(3) 上司一瞧不好辦、就把他的局差給撤了。（『談論新篇』）

(4) 為飢寒所迫、也就把人給擠対得為非作歹了。（『談論新篇』）

(5) 叫一個長虫把没出窩儿的雛儿給呑了。(『伊蘇普喩言』)
(6) 一陣風呼的一声就把假頭髪給刮跑了。(『伊蘇普喩言』)
(7) 不管怎麼様、我求你千万別把這個事給泄漏了。這是一件機密的事情。(『官話指南』)
(8) 你回頭把我脱下来的東洋衣裳給疊起来。(『官話指南』)
(9) 把看地的人給打躺下、硬把糧食給搶了去。(『生財大道』)

〔〝給〟の使役文について〕

〝給〟は兼語文に用いる。〝NP1+V1+NP2+V2〟の中の〝V1〟となり、〝NP2〟が〝V1〟の目的語、〝V2〟の主語となる時に、〝給〟は〝与える〟という意味から使役動詞の意味あいへと変化する。現在使われている〝叫、讓〟に類似する。例えば以下のようである。

(1) 你是説乖巧的話給人聴哪。(『伊蘇普喩言』)
(2) 叫獅子一過去、就見過高低儿給你瞧。(『伊蘇普喩言』)
(3) 他説完了就把取印子銭的摺字拿出来、給官瞧了。(『官話指南』)
(4) 叫我先把那両部拿了両套来、給您看看。(『官話指南』)
(5) 我給您姐儿倆見見。哦、我們認得哇。(『官話指南』)
(6) 好哇、明儿您讓我姐姐給我瞧瞧。(『官話指南』)
(7) 我這儿可以先給湊出一半儿的貨銀来。(『談論新篇』)
(8) 這個銀子墊了有七八個月了也没給我們帰、我們也並没催過、這也就很有交情了。(『談論新篇』)

〝給〟が使役を表す用法は明末清初期にはまだ少数であったが、『醒世姻縁伝』に見られ[路 二〇〇六:三七]、清代の新しい用法と言える。

〔〝給〟〝叫〟の受身文について〕

〝給〟が受身を表すのは、清末の新しい用法である。〝叫〟の受身文は清末口語に大いに用いられるようになり、これらの教材で用いられた用例は、この特徴を示し、先行研究の不十分な点を補った。例えば以下のようである。

(1) 獅子猛然掉過来、一眨眼儿的功夫、(驢)就給咬死了。(『伊蘇普喩言』)
(2) 凡人有不願意人知道的事、若是給他泄露了、直比当面儿罵他一頓、他恨的還利害、所以這一節、不可不慎重的。(『談論新篇』)
(3) 海是靠不住的啊、可怜哪、把在這上面走的人們全都叫他害去。(『伊蘇普喩言』)
(4) 若不然、你的嘴、早叫人擰腫了。(『官話指南』、全四例)

(5) 因為寡不敵衆、倒叫賊把査夜的一個兵硬拉了走了、走出有七八里地去、才放回来的。(『談論新篇』、全八例)

なかでも〝叫…給V〟受身文が現れたのは清末受身形の特徴である。以下のような用例がある。

(6) 偏巧走到大街上、叫下夜的兵給拿住。(『官話指南』)

(7) 冷不防還有常叫他們給打敗了的時候呢。(『生財大道』)

(8) 来不来就叫人把自己終身的家当儿給硬吞了去了。(『生財大道』)

(9) 叫一個長虫把没出窩的雛儿給吞了。(『伊蘇普喩言』)

三　教材から見た明治時代の中国語教育の特徴

以上、明治時代の中国語教育を教材という観点から概観した。北京官話の需要に伴い、多くの教材が出版された。その変遷と資料価値については前章で述べてきた。本章では、こうした教材が生み出された社会的状況を踏まえ、再び教材の特徴から明治時代の中国語教育を論じたい。

(1) 低かった中国語教育の位置付け

日本の中国語教育は内容面から見ると、明治時代に大きな変化を迎えた。つまり古典文語から白話中心へ、口語は南京語から北京官話へと変化したのである。

教育方法の観点から見ても、明治以前には専門の中国語学校もなく、専任の中国語教師もいなかったのに対し、明治維新以後は中国語学校、専任の中国語教師が誕生するという大きな変化が起こった。教材もまたしかりである。当初は唐通事時代の旧い教材が引き続き用いられたが、明治維新後、一連の北京官話教科書が出版された。しかし日本の官話教育と教材の編集は、明治政府の政治、対華外交政策の動きと密接に関係するものであった。教材は体系化されたにもかかわらず、中国語には高い地位が与えられず、大学で学ぶ外国語ではなく、せいぜい専門学校で学ぶ外国語とされていた。「中国語合格者は、ほとんど東京外国語学校と上海同文書院の出身であった」[安藤 一九九一：四]。

(2) ビジネスと軍事に特化された教材

安藤[一九九一]は明治維新の後、中国語はその文化的背景を顧みる必要のない、実用会話中心の「特殊外国語」(ビジネスと軍事、つまり商人中国語と兵隊中国語)と見なされ、ごくわずかの人が学んだにすぎないと指摘している。この現象も当時の中国語教育全体のすすむ方向性に影響を与えた。

教材を見ると、場面は北京官僚界、宴会、訪問、中国人の使用人との会話等に設定されている。生活上の付き合い

でよく用いられる文型、語彙を主とし、中級や上級にいたるまでほとんどが挨拶や社交会話である。また主人が使用人に仕事を言い付けるときの言葉、人に仕事を依頼する時の言葉等もある。これらは一問一答形式で実用的である反面、中国の伝統文化、中国の現実社会にはほとんど触れていなかった。『談論新篇』では近代中国や近代北京に関する新鮮な材料も使われた。しかし、これらとて貿易等の内容に関するもので、依然として「商人中国語教材」の域を出なかったのである。

(3) 出現しなかった斬新な教材

西洋の著作の日本語翻訳を北京官話に翻訳した教材を除けば、当時の中国語教材は、基本的に『語言自邇集』の様式を引き継いだものであり、千篇一律、過度に規格化、単純化されたきらいが否めない。

注

〈1〉 六角の七区分は、以下に続く。第六期：大正九年(一九一九)～昭和六年(一九三一)、日本国内と「満鉄」の中国語教育がより発展した。第七期：昭和六年(一九三一)～昭和二〇年(一九四五)、日本の中国侵略戦争の激化にともない、中国語教育はいっそう軍国主義の道具となっていった。

〈2〉 中田敬義「明治初期の支那語」『中国文学』全第八三号、一九四二年、掲載。銭婉約[二〇〇五：六九]より引用。

〈3〉 張方 [二〇〇五：二〇一]。

〈4〉 出版時期と主な内容は以下のとおりである。第一巻は明治一二年(一八七九)六月に出版、副島種臣が〝善隣〟の二文字を付し、王治本の序と自序、凡例と五音図とつづく。本文散語四〇章、六六頁、「散語四〇章抄訳」二〇頁を添える。本文上欄に六字話一一八句、欧洲奇話一三条。第二巻は明治一三年(一八八〇)二月に出版、巻頭に龔恩禄の序文、つづいて散語一八章、ことわざ七条、上欄に欧洲奇話六条を収録。第三巻は明治一三年(一八八〇)三月に出版、中村正直の序文、問答一〇章、上欄に欧洲奇話四条を収録。第四巻は明治一三年(一八八〇)五月に出版、議論五〇章、上欄に欧洲奇話三条、つづいてことわざ一条。第五巻は明治一三年(一八八〇)五月に出版、議論五〇章、上欄にことわざ九条。第六巻は明治一三年(一八八〇)八月に出版、発音表記法凡例四頁、平仄編三八頁、全四二〇音節に相応する漢字を収録。第七巻は明治一三年(一八八〇)八月に出版、会話例一五段六二頁、上欄にことわざ一一条。陳珊珊[二〇〇五]参照。

〈5〉 日本の中国語教育界は、『官話急就篇』を第二次世界大戦前の日本における中国語教科書の〝経典〟と評価し、一七〇回余り重版した。後に宮島大八は『急就篇総訳』『羅馬字急就篇』『急就篇発音』『続急就篇』を翻訳編集し、さらに『日華字典』『時文類纂』『支那官話字典』『支

那語会話篇』等を編集した。王順洪［二〇〇三a］参照。

〈6〉張廷彦は、日本文部省が招聘した支那語学校の中国語教師で、宮島大八とともに仕事し、親交があった。

〈7〉『北京官話士商便覧』上巻、形式はおよそ『談論新篇』と同じで、口語会話五〇章からなり、当時の商人、役人が話すような話題を反映させている。

〈8〉考えうるに、長孝移は、「張孝移」ではないか［六角 一九九二：一四五］。「監生、張孝移、東京外国語学校講師。清国湖北出身」。

〈9〉考えうるに、張廷彦は、「張廷彦」ではないか［六角 一九九二：一四五］。「文生員、張廷彦、帝国大学、高等商業学校講師、清国北京出身」。

〈10〉『語言自邇集』注に「〝纔剛 ts'ai-kang〟と〝剛纔 kang-ts'ai〟は置き換えられるが、〝剛纔〟は時間がより現在に近い場合に用いられる」とある（一四〇頁）。

〈11〉『語言自邇集』注に「〝多少錢 to-shao ch'ien〟は、北京語ではよく〝多儿錢 to-'rh ch'ien〟と言う」とある（一八一頁）。

〈12〉〝来着1〟：清末期以前は過去を表し、過去の出来事が現在に影響することを強調した――完成体を表す。ある出来事が発生して間もないことを表す。〝来着2〟：清末期以後は過去を表さず話し手の主観的な心情を表す――語気を表す。

〈13〉『語言自邇集』注に「料估 liao ku は、推測、推量。料 liao は、予測の意味。この語を用いるときは、ほとんどが命令願望の語気（imperative mood）で、〝料估〟の後は常に〝着 cho〟を続ける」とある。

〈14〉『語言自邇集』注に「来不来的 lai pu lai ti は、ともすれば」とある（二五五頁）。考えうるに、一般に中心となる動詞の前に用い動作の方法を表す。「是不是的、好不好的、動不動儿」の用法もこれに同じ。

〈15〉『語言自邇集』注に「末末了儿 mo^4 mo^4 $liao^3$-'rh は、最後に。二つめの〝末 mo〟は、少し軽く読まれたかもしれない。〝末了儿 mo liao-'rh〟あるいは〝末後 mo hou^4〟としてもよい」とある（一四一頁）。

〈16〉您納は、『官話指南』では〝您哪〟、『参訂中国語問答篇日語解』では〝你吶〟と書かれている。『北京話詞語』［二〇〇一：六三六］に「〝您吶〟ともする。nin nei とも読む。丁寧語で、相手に対し尊敬、親しみ等の意を表す」とある。

〈17〉『語言自邇集』注に「左近 tso chin は、付近、左 tso は、〝左右 tso yu〟を省略したもの」とある（四二〇頁）。

〈18〉那敢情好您再来您挨這儿住幾天（あなたがまた来てここに数日泊まることはむろん構いません）。『燕京婦語』第五課第六節。周一民［二〇〇二：一四三］によると現代北京方言で場所を表す前置詞は、在、挨、跟の三つある。

〈19〉『北京話詞語』［二〇〇一：六三］に「心苦しい、気がひける、恥ずかしくて耐えがたい」とある。

〈20〉『北京話詞語』［二〇〇一：二〇二］に「(1)完成、竣工、出来上がる。(2)よい、わかった、もういい。話を終わ

らせる時に用いる」とある。

〈21〉『語言自邇集』に「腴 ㄩ、石鹸、ブタの油から抽出した。後ろに必ず〝子 tzŭ〟を続ける」とある（九〇頁）。

〈22〉『語言自邇集』問答章の十に「請菜。我可不布、都没外人、自取罷」（どうぞお取り下さい。見知らぬ人というわけではないので、私は取り分けませんから、ご自身でお取り下さい）とある。注に「布 pu は、取り分けるの意」とある。『北京話詞語』［二〇〇一：七九］に「布菜とは、他の人の椀や皿に料理を取り分け、配慮や親しみを表すこと」とある。

〈23〉『語言自邇集』注に「扎挣 cha² chêng は、努力して自ら持ちこたえること」とある（二四五頁）。

〈24〉『語言自邇集』注に「普里普儿 p'u³-li-p'u³-'rh は、すべて、一族の意。人や物を指す」とある（二四七頁）。

〈25〉『語言自邇集』注に「望看 wang k'an は、〝拜 pai〟や〝拜会 pai hui〟に比べ堅苦しくなく、自分と同等の人や親しい友人の間や、目上から目下に対し用いる」とある（一五七頁）。

〈26〉『北京話詞語』［二〇〇一：一五九］に「打哈哈は、からかって、真面目に事を行わないこと」とある。

〈27〉李煒［二〇〇四］は『児女英雄伝』（海南出版社、一九九六年、六一万字）には〝給〟が一〇四五回現われるが、この種の〝給〟は一七例であると指摘した。例えば、(1)你瞧把個小院子儿給擺満了！（ほら庭いっぱいに並べたよ）（二十七回、三九八頁）。(2)把個天王殿穿堂門儿的要路口儿給堵住了（天王殿の門の所に立ちふさがった）（三十八回、六二三頁）。

参考文献

［日］安藤彦太郎著、卞立強訳　一九九一　『中国語与近代日本』北京大学出版社。

陳剛編　一九八五　『北京方言詞典』商務印書館。

陳珊珊　二〇〇五　「『亜細亜言語集』与十九世紀日本中国語教育」『漢語学習』第六期。

程相文　二〇〇一　「〈老乞大〉和〈樸通事〉在漢語第二語言教学発展史上的地位」『漢語学習』第二期。

傅民・高艾軍編　二〇〇一　『北京話詞語』北京大学出版社。

胡山林　二〇〇二　「訓読：日本漢学翻訳古典漢籍独特的方法」『日本研究』第二期。

江藍生　一九九四　「『燕京婦語』所反映的清末北京話特色（上）」『語文研究』第四期。

李煒　二〇〇四　「加強処置／被動語勢的助詞〝給〟」『語言教学与研究』第一期。

劉雲　二〇〇六　「北京話使役兼被動現象研究——以〝讓〟和〝給〟為個案」語言大学修士論文。

［日］六角恒広　一九九一　『中国語教本集成』第一集第一巻、不二出版。

［日］六角恒広著、王順洪訳　一九九二　『日本中国語教育史

研究』、北京語言学院出版社。
[日] 六角恒広著、王順洪訳　二〇〇〇　『日本中国語教学書志』北京語言文化大学出版社。
[日] 六角恒広著、王順洪訳　二〇〇二　『日本近代漢語名師伝』北京大学出版社。
路広　二〇〇六　「『醒世姻緣伝』的〝給〟与〝已〟」『語言研究』第一期。
斉如山　一九九一　『北京土語』北京燕山出版社。
銭婉約　二〇〇五　「論近代日本中国語教育発展的曲折性」李向玉・張西平・趙永新主編『世界漢語教育史研究』澳門理工大学出版社。
石毓智　二〇〇四　「兼表被動和処置的〝給〟的語法化」『世界漢語教学』第三期。
宋孝才　一九八七　『北京話語詞匯釈』北京語言学院出版社。
[英] 威妥瑪編著、張衛東訳　二〇〇二　『語言自邇集――一九世紀中期的北京話』北京大学出版社。
魏愛蓮　二〇〇三　「〈史記〉是日本的漢学教科書」『湖北成人教育学院学報』第五期。
王順洪　一九九九　「六角恒広的日本近代漢語教育史研究」『漢語学習』第四期。
王順洪　二〇〇三a　「日本明治時期的漢語教師」『漢語学習』第一期。
王順洪　二〇〇三b　「三十年来日本的〝漢語熱〟」『雲南師大学報』第二期。
王澧華　二〇〇六　「日編漢語読本『官話指南』的取材与編排」『上海師範大学学報』第三期、六六―七二頁。
張方　二〇〇五　「従『俄漢合璧字匯』看俄国一九世紀漢語教育的辞匯和語音教学」李向玉・張西平・趙永新主編『世界漢語教育史研究』澳門理工大学出版社。
張美蘭　二〇〇五　「掌握漢語的金鑰匙――元明清東西方漢語教材特点比較」『国際漢学』第一二輯、大象出版社。『世界漢語教育史研究――第一届世界漢語教育史国際学術研討会論文集』所収、澳門理工学院出版社。
周一民　二〇〇二　『現代北京話研究』北京大学出版社。
朱德熙　一九九一　「〝V-neg-VO〟与〝VO-neg-V〟両種反復問句在漢語方言里的分布」『中国語文』第五期。

（邦訳　松林知子）